

随 想

国際交流委員会の活動状況

堀 川 一 男*

1. 国際会議の重要性

わが国の鉄鋼業は誠にきびしい試練に直面している。

こうした深刻な情勢は戦後の歴史の中で初めてのことである。一般鋼材の伸びに期待がもてない以上この苦境の乗り切りには合理化の徹底と高付加価値製品への移行促進以外は無いわけであるが、同時に業界の協調と特に国際協力に真剣に取り組む必要がある。もともと日本の鉄鋼業の体質は使用する原料・エネルギーのほとんどを海外に依存し、しかも円高ショックのあおりで業績が悪化したことでもわかるように直接・間接の製品輸出で成り立っているのである。また巷間、基礎科学は欧州、技術開発は米国、生産技術と品質管理は日本と言われているように、国により特徴が異なるからわが国が科学技術を発展させて国際競争力を育成強化するためには今後も海外との学術交流は不可欠である。さらに、戦後欧米に学び研鑽努力の甲斐あつて今や我が国は高い技術水準を誇っているが、もし欧米への技術の還元や新興工業国や開発途上国への援助を惜しみ彼らの期待に応えないと日本は「フェア」でないと非難されて世界の孤児となりひいては世界の鉄鋼業の安定化を阻害することは必定である。国際会議は多数の海外の学者・技術者に直接会って討論し友情を培う機会を与えてくれる。これは到底論文の交換や TV 会議等の物的手段では替え難い利点である。若い人の励みにもなり優秀な人を吸引する効果も期待できる。個人的な友情は国家間の円滑化に役立ち、会議に伴う工場視察は我が国の鉄鋼業の誠によい PR となることも間違いない。

当協会の国際交流事業については田畑氏（前専務理事・元副会長）らの敷かれた路線にのり意欲的な活動を続けてきた。主催した国際会議は 1970 年の「鉄鋼科学技術国際会議」をもつて嚆矢とするが、幸いこれが大好評を博し爾来 4 年ごとに開催されている。引き続き 1985 年半ばまでに「真空冶金」（1973 年、1982 年）、「エレクトロスラグ再溶解」（1973 年）、「切削性」（1977 年）、「圧延（板）」（1980 年）、「薄鋼板成形性」（1981 年）、「材料集合組織」（1981 年）と計 8 回の国際会議を主催した。さらに二国間シンポジウムとして製鋼物理化学について「ソ連」（1967 年から 2 年ごとに 9 回）と、プロセス冶金について「スウェーデン」（1971 年以来 3 回）と、製

鋼について「西独」（1974 年以来 6 回）と、鉄鋼材料について「チェコスロバキア」（1977 年以来 4 回）と、鉄鋼等について「ベネズエラ」（1980 年と 1982 年）と、金属製錬について「豪州」（1980 年、1983 年）と、鉄鋼について中国（1981 年以来 3 回）と合計 29 回開いている。視察団の派遣や受入れ、内外国際会議への共催協賛その他については枚挙に遑が無く、わが国と世界の鉄鋼の学術技術の発展に大きく寄与してきた。

2. 国際交流事業検討委員会のあゆみ

その日（1984 年 9 月 28 日）はちょうど中国大使館から建国 35 周年の祝宴に招かれていたが、午前 10 時半頃木下専務理事から突然の電話があり、協会で「国際交流事業」の在り方を再検討することになったのでその責任者を引き受けて欲しいとのことであつた。老令と荷の重すぎることを考えて一応辞退したが聞けば石原会長が在任中に果たしたいと決意しておられる協会三大改革の一つであつて、私を推挙されたのも外ならぬ会長御自身であつた。石原氏には 40 年間の久しきにわたり特別な御交誼を受けているので、それでは一肌脱ごうと応諾した。早速 10 月 1 日に木下・佐藤両氏と委員会の性格・構成・運営方法等を打ち合わせ、識見の優れた 15 人の精鋭を官学対民 2 対 3 の割合で選び、会期は半年間くらいの短期決戦で臨むことにした。10 月 31 日に第 1 回の委員会を開き爾後月に 1 回くらいの割で精力的に審議を進め、都合 7 回の会合を重ねて翌年 6 月 5 日に報告書をまとめて終結とした。

当協会主催の国際会議は、二国間シンポジウムに比較して開催数が少なく、わが国が当然卒先主導して然るべきと思われる会議が漏れている点が目につく。また二国間会議は歴史も古く頻度も高いが同じ相手国との繰返しが多く、現時点では首を傾げるような相手国も含まれている反面、より重要と思われる国が欠けている。二国間会議は英語が不得手で控え目な日本人向きであり友人がしやすいが、とかく縁が切れずに継続となり、経費や効率の面で問題がある。特に今後は高度成長期と違い台所不如意であるから継続的な二国間シンポジウムの増設を避けるのはもちろん、既存のものも整理したいところである。

しかし発足した時点ではいずれも諸般の事情を熟慮した上で実施した筈だから終結には国際信義を配慮して十分慎重に処置する必要がある。そこで発足の経緯を調べ、会議の参加者に存続の要否を判断する上の参考意見をアンケート形式で募るなどして審議を重ねた。その結果次の結論に達した。

1) 日本・ソ連製鋼物理化学合同シンポジウム……発足後 20 年を経過して大きい成果を挙げたが、ややマンネリ化しており使用言語で円滑を欠くこともあるので、約束している最終回を日本でやり終息とする。

* 本会国際交流委員会委員長 日本鋼管(株)社友 工博

2) 日本・スウェーデンシンポジウム……製鋼はもちろん他の面でも期待がもてるので対象をノルディック諸国に拡げて予定どおり次回は日本で開催する。

3) 日本・ドイツセミナー……うまくかみ合っているので継続するが発足後 10 年を経ているので次回は開催方法等につき再検討する。

4) 日本・チェコスロバキア合同シンポジウム……約束した期限に達しているので延長することはしない旨通知することとするが、約束している東京での最終会議は実施する。

5) 日本・ベネズエラシンポジウム……効果が期待しにくいので自然終結とする。

6) 日本・オーストラリアシンポジウム……鉄鋼業の規模が違いすぎるので先方の希望があれば国際会議を考える。

7) 日本・中国鉄鋼学術会議……技術交流に問題がないわけではないが、発足後日が浅く外交的にも重要なので当分続け、運用方法は検討を加える。

今後の国際会議については計画性をもつて効率的に実施する必要がある。まず候補テーマを公募し、提案されたテーマにつき発展性や国の内外で過去及び現在実施計画されている会議を勘案して十分審議の上順位をつけ、企画委員会に諮ってから理事会にかけのが適当であり、参加者 100~150 人くらいの規模の会議を 1~2 年に 1 回くらい催し、数年に 1 度は 1000 人前後の大規模のものを考えることにした。こうした運用を実行するには国際交流委員会 (仮称) の常置が必須と思われるので、その旨を結論とした報告書を 1985 年 6 月 7 日開催の企画委員会に諮った上 6 月 11 日の理事会に答申して賛同を得た。かくて本委員会は所期の目的を果たしたので解散することにした。ただし正式な常置委員会が発足するまでは引き続き問題の処理に当たることにしたが、たまたま準備が進んでいた第 10 回の日ソシンポジウムが 7 月 18、19 の両日東京で開催されたので 19 日にソ連代表団に今回をもつて最後とする旨を口頭と文書をもつて通告した。また圧延 (鋼管) の国際会議も予定どおり 9 月 2~5 日に実施した。

3. 国際交流委員会の発足

「検討委員会」は委員各位と木下氏以下事務局の絶大な御後援により使命を果たしおほめの言葉をいただいたのでこれで済んだと涼しい顔をしていた。常置委員会の委員長は理事会の満場一致で会長に指名を一任していた。7 月 5 日は午後本社で会議があったので昼前に連絡のため木下専務を訪ねたが、開口一番私が指名されると告げられ正に青天の霹靂だった。委員長に誰が就かれようと「筋書きは作つたがあとは知らない」では無責任だから軌道に乗せるまでは応援する気でいたがよもや私自身が選ばれるとは夢にも思っていなかった。委員は

先の「検討委員会」がもともと最適任者で構成されていたので、特に都合の悪い方以外全員に留任して貰い、さらに会の重要性に鑑みて副会長、研究・編集の両委員長に顧問に就任願うこととし 9 月 25 日に委員会を発足させた。「検討委」は過去の実体を明らかにして今後のあり方について示唆を得ればよかつたので楽だったが、今後は企画から実施までの全責任を負うわけである。さつそく規程や内規の整備、長期計画の設定、事務局責任範囲の明確化等に着手した。

また「共同研究会」の海外技術交流であつても協会の予算を伴えば企画立案の段階から接触して貰うよう要請せねばならない。実はカナダから 1984 年 12 月 3 日付で日加セミナーの提案があり、「検討委」が始まつた直後だったので回答保留中だったが早急に決着を計るべきなので翌年 4 月 10 日の委員会で審議し、一回限りの提案であり日本側にも有益なので応ずることとし、大須賀委員 (鋼管) を実行委員長として準備していた。これを本委員会発足後の 12 月 3、4 日に友好裡に開催した。更に、会期の迫ってきたノルディック諸国、チェコスロバキア及びドイツとのシンポジウムについては実行委員長にそれぞれ雀部 (千工大)、菊池 (東工大)、萬谷 (東北大) の各委員に就任願ひ、効率的な会議の実現を目指して活動を始めた。しかし委員会の最重要案件は「長期計画」と「成果を落とさずに会議費を削減する方策」であつた。

国際会議のテーマは公募を建前としたが、今回は便法として顧問と委員全員にアンケート用紙を配り、候補テーマの名称・内容・開催年度・規模その他を記載して貰い、委員会で必要性や効果の点から逐一検討した。必要に応じ臨時の小委員会で煮つめるなどして取捨選択して長期計画案とし、企画委員会の審議を経て理事会で承認して貰った。表 1 はこれを摘記したものである。来年度予定している「加工熱処理」は今までに海外で「マイクロアロイング」あるいは「低合金高張力鋼」の名で数回開催されてきた会議を継承するものであるが、鋼種やプロセスの技術開発については頂点近くまで達した感があるので、我々は「基礎」に重点を置きチタン等の「非鉄金属」にも範囲を拡げて新機軸を出して全く別の会議にすべく野心に燃えている。田村教授 (京大) を実行委員長、牧委員 (京大) らを幹事として準備を進め既に 2nd circular の発送を終えたが、是非成功させたい。また「材料評価に関する国際会議」は複雑化、苛酷化した環境下での材料の性能、挙動を理解するための評価方法と特にその材料開発への貢献に重点を置く斬新な試みで、邦武委員 (住金) を中心に構想を練っており、今回はテーマを土木・海洋環境に絞った。「亜鉛及び亜鉛合金めつきによる表面処理鋼板に関する国際会議」は最近世界的な広がりをもつて著しく進歩しつつある分野でありその技術の開発や普及に強い影響力を持つ日本での開催は極めて

表1 国際会議の経費と予定

	年	会 議	支出*2
実	1980	庄延(板) 日本ベネズエラ* 日豪* 日独	16 824
	1981	薄鋼板成形性 材料集合組織 日ソ 日本スウェーデン* 日中* 日本チェコスロバキア	26 654
	1982	真空冶金 日独* 日本ベネズエラ	17 767
	1983	日ソ* 日本チェコスロバキア* 日豪 日中	16 883
績	1984	日独	6 143
	1985	庄延(鋼管) 日中* 日ソ 日本スウェーデン 日加	14 588
	1986	日本ノルディック	
	1987	日本チェコスロバキア 日独* 日中	
予	1988	加工熱処理	
	1989	亜鉛及び亜鉛合金めつき鋼板 材料評価 (日独) (日中*)	
	1990	第6回鉄鋼科学技術 ステンレス鋼	

* 相手国開催 () 未定 *2 単位 1000 円

有意義であり、大橋委員(川鉄)に準備をお願いしている。「第6回鉄鋼科学技術国際会議」は1970年に当協会が東京で開催した会議がきっかけとなり爾後4年間隔で継続しているものであるが、ちょうど協会の75周年(ダイヤモンド年)に20年ぶりに里帰りするので、日本鉄鋼業の威信にかけて立派にやり遂げたい。「国際ステンレス鋼会議」は既に海外でも数回開かれてはいるが、生産量で自由世界の1/3を占める日本が主催すべき時期がきている。「需要開拓」を特徴とする会議を菊池委員(東工大)、沢村委員(日金工)が提案している。

国際会議開催に要する経費の最近5年間の実績(表1)では毎年平均1650万円の支出となっていて、このほかに事前の調査や準備に年間500万円くらい費している。今後ますます経理面が窮屈になると予想されるので、開催頻度を維持あるいは増加するには毎回の出費を切り下げねばならない。

そこで、参加者数を約200人と見込み、会期を3日とし、登録料は5万円に据置きとして会場費、謝礼、食事代、寄附、広告、展示会、外注依頼等のあらゆる面から削減方を検討した。その結果毎回の支出を1/3くらいに圧縮できそうで、各社の研修所等を利用すれば更に15~20%節約できる見込みである。ともあれ「親方日の丸」意識の甘えを捨て精一ぱいの自助努力を傾けて協会の負担軽減を計ることが要請されていると思う。

4. 国際交流事業の発展を願って

幸い、委員会発足後に開催したカナダ及びノルディッ

ク諸国とのシンポジウムは共に大成功だったが、今年はチェコ、ドイツ及び中国との会議が控えている。チェコとの会議は今回を最後とすることになっている。ドイツとは既に10年以上継続しているのでこの会議で今後の運用を再検討して貰いたい。また中国との会議では、覚え書の改訂期に当たるので、よりやりやすいように改める必要を感じている。翌々年以降の会議については近々実行委員会を発足させる予定である。

私が初めて国際会議に参加したのはちょうど30年前(1957年)にASMが主催した第2回世界冶金会議であった。会議の前に大竹氏(八幡)や浅田氏(大同)ら数名と視察もしたので1か月半の訪米旅行となつたが、その時の強烈な印象が私に国際交流に微力を盡くさせる動機となつた。企業内では海外への留学生の派遣や受入れ、国際会議への参加・派遣、海外との情報交流会や共同研究会の企画推進を行つた。

また学界では1970年の「鉄鋼科学技術国際会議」では実行委員、技術委員、座長を勤め、これに先立つ日本金属学会の「金属および合金の強度に関する国際会議」にも組織委員を引き受け、今日まで国際交流事業には努めて協力してきた。

その体験からわが国の国際会議を回顧すると誠に今昔の感に耐えないものがある。昔は国際会議は一種の記念行事であつて、「組織委員会」、「実行委員会」、「技術委員会」、「募金委員会」、「総務委員会」等々を大袈裟に設立したり留学生を動員したりまるでお祭り気分であつた。それが今は全く日常業務として処理されている。確かにわが国の国際交流事業は隆盛になつてきた。近頃の若い人は英語で難なく討論しているが、昔は発表は何とか済ませても質問に立往生したり、会議中沈黙で通す人が少なくなかつた。しかし世界的な視野で見ると量、質共に国際交流はこれからだと思う。ますます複雑多様化する国際情勢に対処してより積極的な活動が望まれる。現在の当協会の事務局は良く訓練された有能者が揃つていて事務処理に遺漏は無くほめていい。しかし更に能率の向上を望めば、内外の会議情報の整理とか会員の協会役員歴や専門別を記載した名簿あるいは海外の学識者リスト等にコンピューターの導入を検討してみる必要があるかもしれない。また国際的な事務協議の場で海外のベテランと互角に太刀打ちし、当方の主張を適確な発言で貫き主導権を握ろうとするならば、適材を計画的に教育し、要すれば海外の学協会に留学させる等によつてプロを育てることが必要であろう。資質の向上を計るにはそれ相応の投資は覚悟せねばなるまい。